

Title	現存うつほ物語の本文について
Author(s)	野口, 元大
Citation	語文. 1954, 12, p. 1-13
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68454
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

現存うつほ物語の本文について

野 口 元 大

うつほ物語の本文の錯乱が問題となる時、よく引用されるのは弘安源氏論議の次の一節である。

うつほの物語のならば、愚本にみざる所なり。かの物語も、「詞のイナシつどきおぼつかなし。まことに」言葉のほひとみゆる所もあり。

(又)おもひかけざることをいへるもあ「るべし」。(註)

この部分は弘安源氏論議それ自身にかく有力な異文のある所であつて、はつきり断定することはできないが、うつほ物語の本文の乱れが当時はやくも存在してゐたことに對する有力な一資料であり、その淵源する所甚だ遠きを思はせるのである。

この弘安源氏論議より数年前、風葉和歌集が成つた。そしてそこにはうつほ物語の歌は一一〇首とられてゐる。ここに我々は歌だけとはいへ、最も古いうつほ物語の本文の一に接することができるのである。更にその詞書によれば、プロットも亦ある程度は窺ひ得るのである。集中に収められた歌を検すると、

みし世にそかくもいはましなけきつゝ又はみるよのなきそ悲しき (註)

とある歌が現存物語本文では

みしよにそかくもいはまし歎きなくしての山ちをいかて越らんとなつてゐる以外は殆んど見るべき異文なく一致してゐる。そし

長い間半ば忘れられたやうな存在であつたうつほ物語も、近頃ではいろいろな方面からする研究が行はれるやうになり、注目すべき成果を挙げつつあることは、まことに喜ばしいことであるが、それらすべての研究の基礎となり、前提となるべき本文についての解明は、すでに先学の二三試みられ、相当の成果も収められてゐるところではあるけれども、未だ安んじて諸々の研究の前提とするに足るだけの域には程遠いものと言はなければならぬやうである。勿論うつほ物語の場合、資料の絶対的不足がこの上ない障碍をなしてゐて、完全な復元は不可能であるが、せめて可能な範圍で現存の本文がどの程度の信憑性をもつてゐるものであるのか、又甚だ異つた本文を有してゐて決して同一の原形から分派したものと考へられない流布本系統の本文と玉松系統の本文とはいづれが正しいものであるのか、そしてこの二系統の本文が如何にして生じたものであるのか、これらの問題について多少とも考察を加へてみようとするのが本稿の趣旨である。

て、この歌そのものも京大本によれば、

みし世にそかくもいはましなけきつゝしての山路をいかてこゆらん、

と見えるのであつて、物語本文とはほぼ同じである。

ただここに問題となるのは、現存物語に見えない歌が三首存在することであるが、この中一首は風葉集自体の伝写過程に於いて誤つてうつは物語の歌とされたものと認められるので、問題とされるのは二首である。この一一〇首中二首といふ散佚率は源氏物語の一八〇首中四首よりも更に低率なのであり、しかもこの二首の脱落は物語の中核的な部分の脱落を意味してゐるとは考へられないのである。この脱落した二首といふのは恋五にあるあて宮と雅明との贈答歌である。(註3) 平中納言雅明はあて宮に時折恋歌を贈つてゐるだけの人物であり、「貴宮」以後の巻々では全くといつてよい位姿を消してしまふのである。この歌も彼の他の歌と同様何ら特別な事件に於いて贈られたものとは考へられず、季節の推移、年立上の位置、或ひは人物の登場の仕方などから考へて、この歌は元来「祭の使」巻末にある贈答歌群中にあつたのではないかと推測されるのである。なほ集中の詞書によつて考へられるプロットはすべて現存物語と一致するのであるから、この風葉集から推定される限りに於いては、現存うつは物語の本文は源氏物語と同等以上の信頼度を有するといへるのである。

嘗つて片寄正義氏はうつは物語の現存本文と、河海抄及び花鳥余情に引用されてゐる本文とを比較してそれがよく一致することを指摘され、現存本文がそのかみのものとひどく異つてはゐないであらうと結論されてゐる。(註4) 氏の比較されたところを見ると、物語

の現存本文としては非常に誤脱の多い板本を使用され、河海抄、花鳥余情も手近な流布の本をとられて十分吟味されてゐないやうであるが、両者とも可能なかぎり信頼できる本文をとつて比較するとその一致は殆んど完全に近くなり、時には誤謬と考へられるものまでが共通してゐる程である。

次に河海抄から現存物語本文と対比しながら一例を挙げてみよう。(註5)

うつはの物語に云ナレかの兵部卿ノミのこはらといはず。こしみ所ある人もまつうちみるにかの君を女になしてもたらまほしくさみゆるまほしくなむ女ノミの心とめてかの御このいひたわふれ人にはいかナシはさのみしもあらんとみればことほりなり

(若菜上)

同じく花鳥余情では、(註6)

うつは祭の使 かゝるほとに六月ころおひに成ぬ大将殿池ひろくふかく色々コホのうへききしにそひておひたり水のうへに枝さし

かの兵部卿のみこはらからともいはずこしみ所ある人なりまつうちみるにもかの君を女になしてもたらまほしくさならすはわれもたらまほしくなむみゆるまほしくしなさけあらん女ノミの心とめてかのみこのいひたはふれんにはいかナシはいとまめにしもあらんとみればことほり也

(初秋)

かゝるほとに六月のころほひにもなりぬ大将はいけひろくふかくいろノミのうへききしにてをひたる水のうへ

入なとしたるなか嶋にかたはらは水にのそきかたはらはしまにかけいかめしきつり殿つくられおかしき舟ともおろしうきはしわたしてあつき日さかりには人々すゝみなどし給に十二日いとまの日にてまいる給はぬをつり殿にてけふすゝませたてまつらんけふあらんくた物など給へよときこえをき給てつり殿にて給ぬ。きんちちなとさふらひ給ふにに

おまへの池にあみおろしうをおろしてこいふなとせよきひしおほきなるみつふうきとりいでさせいかめしき山もひめもなと中嶋よりとり出てひらをかしきこかめとも水にひろいたてなとしてすゝみあそひ給てあるしのおとふふににこのすきものともひとりもなきさうしやなिकासみとう侍従よひにや

にえたさしいりなとしたるなかしまにかはたムシははは水にのそきかたはしまにかけいかめしきつりとのつくられておかしきふねともおろしうきはしわたしあつき日さかりには人々すゝみなどし給ふにに十二日いとまの日にてまいる給はぬをつりとのにてけふすゝませたてまつらんけうあらんくたものなとたまへよなときこえをき給ふにつりとのにて給ひぬ君たちさなからさふらひ給ふにに………(略)………
御まへのいけにあみおろしお、ム、シ ナシム、ム、シ
うをろして、こい、ふなとらせよきひしおほきなる水ふうきとりいでさせいかめしき山もひめもなとなかしまよりとりいて、おかしき胡瓶とも水にひろひたてなとしてすゝみあそひ

れかしふかき契のある人はよしあるおりすくさぬそよきなどの給へはおとろきての給へつかはしたれば三ところながらあそひひとくいてきて舟にのりてつり殿へまうすつ (常 夏)

給てあるしのおとふは、シ、ここにこのすきものともひとりなきさうくしやなिकासみは藤侍従よナシ、シ、ひにやれかしふかきちきりあるひとよしあるおり、すくさぬそよきなどの給へはおとろきてをシをムの給ひムつかはしたれば三所ながらあそひ人といてきて船にのりてつりとのへまうへシつ (祭の使)

他の諸例もほぼ同様であるが、ただ次の「東屋」の一例のみは現存物語中には見えない。
うつほ藤原君 なかことしたうめにこのよりましのまちとをなるとよしはこよひのほたくひにいかみえつるとしたうめこよひのほたくひいとよかりそ
しかしこの引用文自体が全く意味の通じないものであり、大なる誤謬があることは確実であらう。又、現存「藤原君」の巻も錯乱の痕跡をかなりとどめてあるのでこれに關してはしばらく疑問としてとどめておく。
更に古く、鎌倉時代末期には成立してゐた源氏物語古註(註)を見るに、若紫巻「はなちかき」の条に
はなちかき
これは放書敷うつほのなかつ

ゝの大將わか宮の御れうにか
きてまいらせたる手本にもは
なちかきと云事有あめつちの
そのつきにをとこてはなちか
きにかきておなしもしをさま
さまにかきかへてかけり

十二 国ゆつり上

とあつて、事情も本文も一致してゐる。同じく末摘花巻には、
うつほくらひらき下

左大將はしのひてなかの君の御
かたにはいゝりてみ給へはうち
はやふれたる屏風ひとよろひは
かりなつのかたひらのすゝけた
る木丁ひとつふたつたてゝ君は
あやかいねりのところゝやふ
れたるひとかさねすゝけたるし
るきゝぬきて火をけのすゝけた
るに火わつかにをこしたるにた
いひとつたてゝしろきくわんに
おもものひめゝきてもりてすゝを
りはしかみつけたるかふらかた
いしほはかりしてよさりのおも
のにもあらずあしたのにもあら

あめつちそ
そのつきにおとてはなちかき
にかきておなしもしをさま
ナシ、シ
ゝにかへきてかけり
(国譲上)

ナシ、シ

左大將はしのひて中の君の御方
にまいりてみ給へはうちやふれ
たるひやうふ一よろひはかりな
つのかたひらのすゝけたるきち
やうひとつふたつたてゝ君はあ
やかいねりのところゝやふれ
たる一かさねすゝけたる白ぎぬ
きて火おけのすゝけたるに火は
つかにおこしたるにたい一たて
ゝしろきたうわんにおもものひめ
ゝきてすこしもりてすゝを、お
ムシ
りはしかみつけたるかふらかた
いしほはかりしてよさりの御物
ナシ、ム

ぬほとにまいりたり

これ式部卿宮のむすめなれば

ことにおもひよそへらるゝにや

にもあらずあしたの物にもあら
ぬほとにまいりたり

とある外、数箇所引用された物語本文があるが、孰れも現存本文
とほぼ完全に一致するといつてもよいものである。これによつてみ
れば、鎌倉時代末期の学者達によつて、源氏物語以前の本文を伝へ
てゐると考へられたうつほ物語は現存のものとはほぼ同じなのであ
り、現存本文の成立は更に更につつと溯るものであるとしなければなら
ない。

序に言へば、同じく古註末摘花巻に次の一条がある。

おなし二のまきさきの師のもと

こたぢ廿人はかりありぬしものまいるみたいふたよろひひそく
のつきとも

又、やはり鎌倉時代末期の成立たる異本紫明抄(註8)にも

うつほの物語前太宰帥しけのゝますらをか所にぬしものまいる
たい二よろいひそくのへきともむすめともすのたいかねのつき
して物くう

と見えるが、これは現存本「藤原君」に

こたぢ廿人はかりありぬしものさゝま、シゝる、シゝ
ひそくのつきともむすめともすのたいかねのつきとりてまうの
ほる

とあり、三者とも同じものであると考えてよいであらう。ところ
で、この部分はうつほ物語特有のもので、しばしば問題となつてゐ
る所謂絵詞なのである。この問題については最近武田宗俊氏が新説

を提出され、(註9)その成立を鎌倉時代中期以後と見られてゐるやうであるが、これらの例によれば、いづれも単にうつほ、或ひはうつほの物語として引用し、そこに何らの疑念をも挟まず源氏物語以前のものとして扱つてゐるのである。かく當時にあつても所謂絵詞は全く物語の本文と同一視され、後からの挿入といふやうなことは疑はれてゐなからであるから、その成立は更に相当古くまで引き上げられなければならないと考へられる。

なほ、より古いと考へられる本文が源氏物語葵巻古註裏書に見られる。これは池田龜鑑先生の御研究によれば水原鈔断簡と信ぜられるものであり、これによつてわづかながら我々は現存本文の源流を鎌倉時代初期まで辿ることができると思われる。次にその引用本文を挙げてみよう。

今回事

ウツホ云々人ノヤウニコトモ
マヘニスヘテツイナラヒテアラ
ント思ナントテ御ツホ子ヒロク
ツクシムツラハセ給云々是モ御
門ヲリキ給時ノ事也

これは、現存物語に於いても、御譲位直後、院に於いて朱雀帝の仁寿殿に物語られる言葉であつて、古註の記事と一致してゐる。

イタハリノフミ給事

ウツホ十一ニツカサメシニハ兵

部大輔ニ左衛門佐ナリ給ヌサテ

たゞ人のやうにことも
まへにすへてつゝぬならひてあら
ナシ、シ、ムなム
んと思ふなん。とて御つほねひ
ろくつくりしつらはせ給て
(国譲下)

(国譲下)

つかさめしにはみや
ナシ、シ

あこ侍従にひやうふの大輔に佐

八人ノワタクシノイタハリ
リ ヒトリハ伊与介ニイトカタ
リケルヲイタハリナシ給云々

衛門佐なり給。ぬさては人々、
たくしの御いたはりあり右。將
大、
ムシ、セシ、おムシ、ナシ、
はむかし山よりをり給ひし
ムシウ、シ、馬ム
むまそひひとりはいよのすけい
とたかたりけるをいたりなし
給。ふシ
(藏閣下)

この例では引用本文に一部の脱落があるが、これは註釈書の性質上しばしば見られることであり、現存本文はほぼ当時のものと変りないと考へることが許されるであらう。しかし当時の本文が必しもそのまま現在に伝つてゐるのではないやうである。次は一例のみであるが現存本文に見えないものである。人給の項に、

ウツホ云々人タマヒノクルマ一人人タマビ云々

極めて小さな断片にすぎないので、これから多くのことを考へることはできないが、或ひは絵詞の一部ではないかとも思はれる。以上の如く、確め得た現存の諸資料によるかぎり、一般に本文の比較の上からは、現存の物語本文は相当に信頼するに足るものであり、多少の改変があつても局部的なものであらうと推定して大きな謬りはないであらう。

三

前節の検討によつて、少くとも鎌倉時代には現存の本文とはほぼ同じものが行はれてゐたことが知られた。従つて問題はそれ以前になるのであるが、これについては二つの重要な否定説がある。その一は松下博士によつて祖述されてゐる川嶋心貞の宇津保物語考の説で

あり、その二は小林好日氏の語法の面からする否定説である。^(註12)

まづ第一の説から検討して行きたい。これは物語中の人名が平安時代末から鎌倉時代初にかけて實在した人物名と一致するから、現存の物語は鎌倉時代以後に成立したものであるとする説である。しかしこれによつて物語の全部が松下博士の説のやうに否定されるべきでないことは、他のあらゆる徴証によつて明白である。現に風葉集の撰者が当時のうつほ物語を目して拾遺集以前のものとであると信じてゐたことは、その序文よりして疑ひない所である。問題は武田宗俊氏の主張される様な一部の改作の有無であるが、これはもし人名の書き変へだけにとどまるものであれば、たとへ承認されたにして物語の本質にまでかかはるやうなものではない。

確かに心貞や松下博士の挙げられる人名の一致には著しいものがある。ただこれを論拠として改作を主張する説は、何故に如何にしてこの改変が為されたかを十分に説明し得た時にはじめて完璧となるであらう。これについて武田氏に一応の説はある。

時代が變つて平安時代の官位に親しみと敏感さをかくにいたつた時、名がなくて官位だけでは読みにくいので、史上の人物名をかりてこれに附したものであらう。或は姓は註のような形で傍記してあつたものを、後くり入れたのかもしれない。

しかしこの説はここに問題となつてゐる人名が實際物語中に現れる場合、殆んどすべて会話中の自称であるといふ事実を無視して単に抽象的に考へたものであつて、この説明としては承認しがたいものである。かかる場合にはすでに枕冊子にその名の見えてゐる仲忠、涼をはじめ、風葉集にその名が明記されてゐる実忠、雅明その他の人物もすべて同様に語つてゐるのである。風葉集に忠雅、兼雅、

雅頼の名が見えずただ官位のみで記されてゐることも一論拠とされてゐるが、これはむしろこの集自体の体裁の統一上当然であるといへる。源氏物語その他の物語では高位の人に名がないからといふのは、うつほ物語の特異性を無視した議論である。源氏物語その他では単に高位の人々のみならず、極めて特殊な人物以外はすべて無名であるのが一般である。ところがこの物語では当時の公卿の日記に見る如く、わづらはしいまでに行事、装束、かづけ物などの克明な記述があるとともに、人名も同様ただ一度の登場人物といへども極めて綿密に羅列されてゐる。かかるうつほ物語であれば、その主要人物は名前位つけられてゐる方がむしろ自然であらう。

更に松下博士も挙げられ、最近では池田彌三郎氏も^(註14)取上げられた実忠のモデルは、三条中納言実忠なる南北朝頃の人物であるが、この実忠といふ名はそれより以前、すでに風葉集に見えてゐるのである。ここでは人名、官位、住所の三重の一致は全く偶合なのである。かう考へて来ると忠雅、兼雅、雅頼の場合の史実との符合も相似してゐるといへ、完全ではなく、又これらの名はいづれもザラにある名ばかりである。^(註15)偶合ではあり得ないと断定してしまふ前に、前述の如く十分なる説明が要求される。それがなされるまでは一応疑問としてとめておくべきであらう。

次に小林氏の主張された語法上からする否定説であるが、その説を支へる主な根拠は、卑下の格助詞「が」、接続助詞としての「が」、及び助動詞「しむ」の使役以外の用法が、この物語に多く見られるといふことから、これらの用法が盛んな院政期にまでその成立年代を引き下げようとするのである。この説に対しては直ちに宮田和一郎氏による駁論があつて、その多くの例証による精緻な反

論によつて小林氏の立言は否定されてゐる。小林氏に再論(註17)があるが、これはさほど有力なものではないやうである。この論争に於ける宮田氏の立脚点は、用語の差違を単に歴史の変遷のみならず男女の性別によつて考へなければならぬことを強調されるにあつた。即ち小林氏が院政期特有の用語として挙げられた例の一々について、平安時代の男性の手になる文章から実例を多数提示されたのである。そしてうつは物語は用語及び語法に於いては、全体にわたつて殆んど矛盾するところなく平安時代の特質を具備してゐると結論されてゐる。

この宮田氏の説が、うつは物語の源氏物語などに対する言語的 특성性を男女別の用語といふ位相差として説明するものであるのに対して、同じく位相の差であるとはしながらもそれを言語主体の階級性に認められたのが、蓮田善明(註18)氏の説である。氏は「宇津保物語特有の『しむ』に就いて」なる論文に於いて、透徹した見事な分析と明哲なる説明とを示されてゐる。平安朝の主要作品を調査されて、この種の「しむ」の地の文に於ける用例はうつは物語に於ける三例のみで、他はすべて会話に用ひられてゐることを確め、その話者が(1)高貴者、(2)知識階級者、(3)喜劇的人物、(4)下級者に限られてゐることを示される。そしてこの四者の性格をすべて一身に集めてゐる真菅についての特有用語意識を見事に説明したのである。

以上両氏の説によつてみれば、うつは物語の用語や語法が源氏物語や枕冊子と著しく異つて、院政期の今昔物語集その他にかなり近いといふ現象も、後宮女流文芸と貧窮知識階級の文芸といふ全く異質的な階層に属するものであるといふ事実からすればむしる当然のことであつて、何ら怪しむことではないのである。

本節及び前節に於いて述べて来たところで、現存の本文が成立当初のものといたく異つてゐるといふ主張を根拠づける確証は全然ないと言つてよく、むしろ現存本文は予想以上に原型に近いものであるといふ推定が許されさうである。なほこの物語の構成の大体については、現存本が成立当初のものとは一致することはその頃以來残されてゐる資料のすべてが物語つて居り、平安朝の文献にそれを求めれば、周知の如く、枕冊子、源氏物語、公任集、狭衣物語、浜松中納言物語などがあるが、すべてこの例外ではない。

かく現存本文が成立当初の形をかかなりの程度まで伝へてゐるとすれば、それが「詞のつきをおぼつかなし」と言はれて早くから錯乱してゐたと推定されるのは如何なるわけであらうか。はつきりした断定はもとより不可能であるが、これは箇々の本文の伝写過程に於ける誤謬も勿論意味されてゐたとしても、それよりもこの語の発せられた時、主として念頭にあつたのは、現在でも問題とはされながらも未解決の「嵯峨院」と「菊の宴」との重複だの、巻序の混乱だのであつたと考へるのが妥当であらう。前者については稿を改めて考へてみたい。後者については武村豊太良氏が「宇津保物語巻序考(註19)」で復原された巻序が当時行はれてゐたと考へられる。これらはいづれも物語の成立過程に問題が存するのであつて、古くからかく詞つつきがおぼつかなくなつたといふことは、我々の所論を援けるにもせよ、否定するとは全く考へられない所である。

四

次いで我々の取上げなければならない問題は、現存伝本中で極めて特異な性質を有する玉松系統本文の処置如何である。従来うつは

物語について説を立てた諸家は決して妙しとしないが、孰れもこの系統の本文を黙殺して、何らの考慮もはらはれてゐない。ただ最近に至つて河野多麻氏がこの系統の本文を以つて唯一の正統的本文であることを極力主張され(註20)、これに対して今までのところ全然駁論は現れてゐない。もしこの系統の本文が承認されなければならないとすればうつは物語全篇の構成が一変するのであるから、他のあらゆる研究の前提としてこの問題は何を措いても解決される必要があるのである。

まづ古文獻に遺された資料の吟味から考へて行きたい。玉松系統の一つの大きな特色として特異な巻序が挙げられるが、これは現存資料のすべてが食ひ違ひ、これらが示すのは原則的に流布本系統の巻序(註21)である。更に立ち入つて、「嵯峨院」と「菊の宴」の重複部について見るならば、これが「菊の宴」に統合されてゐるのが玉松系統の最も重要な性質なのである。ところが珊瑚秘抄(註22)には

しゐかもと

此名目古哥の中に不見及うつはの物語菊宴巻にあり

優婆塞かをこなふ山のしゐかもとあなそはくしともにしあらねと

と見える一方、花鳥余情の同じ条下には、

うつは第四神楽する所に召人うたひていはくうはそくかおこなふ山のしゐか本あなそはくしとにしあらねは夜

とあり、花鳥余情の「うつは第四」といふのは「嵯峨院」であることは他の引例から明かである。この事実と、さきの全篇の巻序とを総合して考へれば、当時は正統的本文と考へられてゐたのは玉松系

統の本文ではなく、流布本系統のものであつたとしてよいであらう。

なほ、本文そのものの比較からしても玉松系統の本文の独自異文は、やはりこれらの諸資料によつて知られる本文とは異つてゐる。一例を挙げれば、

花鳥余情

かすか祭

うつは第三

みやこ風といふこと

をこかのごゑにしらへこゝのめてたとふ

てをおり、返しあそはす

(若菜下)

流布本	こゝム、シ	琴シ、	かたち風といふ琴を
	宮にかせという事を	こことム	こかのごゑにしらへ
	こかのごゑにしらへ		てこゝのめてたとい
	り、シ、		をりかへしあそはす
	いふておりかへしあ		
	そはす		

この例などは最もよく玉松系統の本文の解釈的性質を示すものである。この性質はまた所謂絵詞の部分の冒頭が必ず「ここは……」といふ語で始まつて、はつきり他と区別されてゐる点などにも窺はれる。

以上の如き検討によつて、玉松系統の本文が必しも信頼できるとは考へられなくなるのであるが、この疑念は更に一步進んで内部徴証に眼を向けると一層強められるのである。この場合にも最も中核的な問題箇所として、「嵯峨院」を「菊の宴」との重複部に考察を限定することが許されるであらう。

この部分に関する両系統の本文を比較してみると、玉松系統の本文から、流布本系統の「嵯峨院・菊の宴」の本文へ分裂して行く原因、過程が説明できないのに対して、流布本系統の本文から玉松

系統の本文が生成する原因や過程は容易に説明でき、又極めてありさうなこともある。この生成過程の説明には河野氏が「宇津保物語の錯簡と細井貞雄の業績」に於いて掲出された図式は極めて都合がよいものである。河野氏の意図される所とは全く逆にこの図式はこの説明のためにのみ有効であるやうに思はれる。

もし玉松系統の如く一つにまとまつた本文が本来存在したのであれば、これを故意にもせよ、無意識の過誤にもせよ、流布本系統の本文に分裂させるといふことは、あの図式によつても考へることはできない。この分割が意識的であると考へようとするれば、それはあまりにも反目的であり、無意識的なものであると考へようとするにはあまりに整然と組織的でありすぎる。逆に本来両巻にはほぼ同じやうな記事が別々に存在したのであれば、これを合理的に整理しようとする志者が出るのは当然であり、厳格な学識のない時代このやうな改変が行はれるといふことは極めてあり得ることである。このやうな見方をすれば、玉松系統の本文が極めて小部分を除けばすべて流布本系統の「嵯峨院」・「菊の宴」の本文の混淆したものであることも説明できる。しかしかくて合成された本文は如何に巧妙になされたとはいへ、随所に矛盾を露呈してゐる。今、その代表的なものを二三指摘し、考へて行きたい。

まづ、流布本系統では「菊の宴」にあり、玉松系統本によれば「嵯峨院」にある

かゝるほとに十一月はかりになりぬ新嘗会の頃春宮よりかくの給へり

以下懸想人たちがあて宮に歌を贈る条を取り上げてみよう。ここでは仲忠は、

頭中将なかたよりむしの祭の使のつかひに出たつとて
と見え、涼も

すゝしの中將しものおけるつとめて

とあつて二人とも中將である。ところが二人が中將になるのは、「嵯峨院」から三巻或四巻を隔てた「吹上(下)」に於いてなのである。河野氏はこの難関を認めながらも、なほ玉松の年立によれば不可能ではないとされるのであるが、後述する如く玉松の年立は成立不可能なのである。藤英も

かくてとうゑいは宣言給はりて六十の試給はり年のうちにうち
かうふりにあたりたれば大将との御いたはりにて七日のひう
ちかうふり給はり十一日に大内記になされ春宮の学士になされ
なとして時めくことこなし

と見えてゐるが、彼がはじめて読者に紹介されるのは「祭の使」に於いてであり、玉松の巻序に従つてもはるか後のことである。さきの涼にしても「吹上」での紹介以前に登場してゐるのである。同様に忠こそもここで

忠こそあさり宮あこ君をよひとりてかく聞え給へり

と現れるが、正しい巻序によれば「忠こそ」以前の巻に見えるのであり、玉松の巻序に従ふとしても山に籠つてまだ世間に出ないうちのことなのである。彼が阿闍梨になるのは「吹上(下)」に於いてであるし、又宮あことの關係を生ずるのもそこである。このやうにこの部分は流布本系統では全然問題のない所であるのに、玉松系統の本文に従はうとすれば解き難い矛盾を随所に生じて来るのである。

玉松系統本によると、この「嵯峨院」で仲忠は中將であるにも拘らず、「菊の宴」ではしばしば侍従と呼ばれてゐる。

かゝるほとにしゅうなかたゝいになくさうそきて夜うちふけて
いてきたれり

藤しゅうとのしゅうの君の御さうしにこもりふし給ひて

三条こそあやしう心あるべき人なれこのしゅうのはよりたぎ
なともなしや

などと見えてゐるが、すべて流布本系統では「嵯峨院」にある部分
なのである。それ以外の部分で仲忠が侍従と呼ばれてゐるのは、二
番目の例と密接に抱合せしめられてゐる部分だけである。そして流
布本系統に於いても「菊の宴」にある部分では、

この神泉のみゆきにつかさのおほいすけすしおなしすけ心と
ゝめてきんつかうまつりしに云々

以下二十箇所あまりすべて中将とされてゐるのである。かく流布本
系統で「嵯峨院」にある部分すべて仲忠を侍従と呼んで居り、一方
「菊の宴」にある部分は極めて特殊な一例を除けば玉松系統本では
「嵯峨院」にあらうと、「菊の宴」にあらうとすべて中将と呼んで
ゐるのである。玉松系統本では一見混乱してゐて全く基準のないも
の様に思はれた仲忠の官位は、かく流布本系統のどの巻に属する
かによつて明確な区別があつたのである。この事實は、玉松系統本
文が流布本系統の「嵯峨院」と「菊の宴」との本文を取つて合成し
たものであることを示すと考へられなければならない。そしてこの
合成は倒る処で馬脚を露はしてゐるのである。一例を引かう。

藤しゅうとのしゅうの君の御さうしにこもりふし給ひて御前
にて兵部卿のみこのしひ給へるさらにすへてものおほえすた
へゑひにけりやなといひてなかつたゝいとおほえすなりにけ

りこのついでに聞えんことつみもあらしな神もゆるしとかいふ
なとかめ給ひそなかつたゝいとひ春宮にてかなしき心せしかな
やかに御前にてしぬとおほえしいかてけふまで侍るならむ源し
ゅうあやしのことへことやしゅうされとふしぬるうちの心ちそ
するやぬしはことすちになり給へるひとはあらすや源しゅうな
にかおほすしゅう玉のうてなともいふ源中将の君こそうらや
ましけれ(中略)このあかつきにうちにきんあそはしつるはた
れと聞ゆるそなかつたゝいましぬへくれなとかいのちみしかくは
(中略)されといと哀にいまめける御ことをなといひて思

ふことかきりなくなりぬ

かな

これは前に流布本系統の「嵯峨院」と「菊の宴」との本文が分ち難
く抱合されてゐると述べた箇所である。この引用文の最初がその前
から引きつゞいて流布本系統の「嵯峨院」の本文であるため、ここ
では仲忠の官位は侍従は統一されて、唯一の例外をなしてゐるので
ある。しかし流布本系統本で「菊の宴」に属する部分では涼は源中
将と呼ばれてゐる。又、仲忠が「ぬしはことすちになり給へるひと
はあらすや」と言はれてゐるのは、帝の御筆たるへき人だからであ
り、更にその彼が「源中将の君こそうらやましけれ」と羨むのは涼
にあて宮を賜ふという宣旨があつたためなのであるから、この部分
は明かに神泉の行幸を踏へてゐることがわかる。それ故この部分で
仲忠が侍従と呼ばれてゐることはいよいよ説明できない。

更に又、右の引用文の最後に見えるやうに仲忠はあて宮の琴を初
めて聞いて感嘆してゐる。しかしこの部分が流布本系統にみるやう
に「嵯峨院」にあれば全然問題はないのであるが、「菊の宴」に至

るまでには、「梅の花笠」及び「祭の使」に於いて既に仲忠はあて宮の琴を聞き、あやまりをおかしもするかと思はるほど感激してゐるのである。

以上の例によつても玉松系統の本文の自己矛盾の様相と、それらがすべて流布本系統では「嵯峨院」と「菊の宴」とに分かれてゐる本文の混成にその禍根を有するものであることは認められるであらう。同様な箇所は他にも十箇所ばかり直ちに指摘することができ

る。なほ、さきにも一寸触れ、河野氏も取り上げて居られるやうに、非常に無理な叙述法ではあるが、玉松の年立に従へば不可能ではないといふ例がいくつもある。そこで次にそれを検討してみよう。まづ第一に「梅の花笠」に仲頼は賭弓の遺響の際貴宮を垣間見て恋病に沈んでゐたのがやうやく起き上がれたとあることなどから、この巻が「嵯峨院」の後でなければならぬことは玉松系統の本文に於いても同様である。又、「嵯峨院」巻頭の叙述によつて仲忠が正頼邸へ行つたのはその時が初めてであり、仲澄と初めて親しく語るのもその直前(時間的に)の「俊蔭」巻末に於いてでなければならぬ。しかるに玉松の年立によれば「梅の花笠」や「祭の使」は「嵯峨院」よりより遙か以前であるにもかかはらず、仲忠と正頼一家とは甚だ親密である。又、「嵯峨院」の初めて仲忠ははじめてあて宮に聞えつくのであるが、「梅の花笠」以下の巻々ではすでにあて宮にしばしば恋歌を贈つてゐるのである。その他かかる矛盾はいくらでも指摘できるあらうが、これらは決して作者の思ひあやまりに帰することのできるやうな性質のものではないことは明瞭である。かくして玉松系統の本文が承認されるためには不可欠の要請である玉

松の年立が全く存立の余地のないものである以上、その本文の正当性も否定されざるを得なくなるであらう。

更に言へば、久樹本の本文を伝える貞雄校本自体についてもその形態上疑念がないわけではない。次にその一二を挙げてみよう。この校本では諸所に一度書いた文字を胡粉を以つて塗抹し、あるひはその上に更に書き直してゐるのが散見されるが、その多くは必しも誤写に基くものとも考へられないのである。例へば、

おほえんよもゆくさき。みしかきちち

とある校合補入も一度はされながら抹殺されてゐる。かかることはその附近に誤写を生じやすい条件が全くないのであるから、嚴密な態度の校合の場合にはありさうもないことである。因にこれは貞雄自ら書写してゐる部分である。次の例は更に著しい。

正頼

春たてと身のかすならぬあをやきは花にましらんことそくるしき

と右肩に作者が註記されてゐるが、この正頼とある下に一度あてみやと書かれ後これが消されて正頼と訂されてゐるのである。この歌は東宮への答歌としてあて宮から奉られるのであるが、歌の作者は実は正頼なのである。従つて註記の訂正も理解されるが、これは明かに誤写の訂正とは性質の異なるものである。

くらはよつを三にはよねと一にはかねなとつまれたりきみた
せに多く
ちなんと云々

とある箇所では「つまれたり」の次にまづ、

かゝるほとに中の十日はかりに年のはての御詠経し給ふへきま
うけし給ふ

とこれだけの文章が補入され、更に右の「かかるほとに」の次に

つきたちて十二月の

といふ語句がその補入部へもう一度補はれてゐる。そして更にこの補入された「年のはての御読経云々」以下が抹殺され、その代りにきさいの宮の御としみの御読経し給ふ

といふ文章が示されてゐる。しかるにこの校合の翌年出版された玉松によるとこの抹殺された文句が採用されてゐるのである。これらの事実もこの本文に対する信頼性を高める所以では決してないであらう。

又、この校本では刊本の数丁が除かれ、それに貞雄自筆の数丁が代つてゐることがしばしばあるが、その際一の例外もなくすべて自筆の部分は丁の最後できちんと終り、それが直ちに刊本の次の丁の最初に接続するやうにされてゐる。そのためには

こゝはたてまところくりやさうしあはせて人はかりへたうあつかりとも

つきたりたかかひたかすへてうゐともあり御とりのなやむとこと

の如く空白を置かずに直接させるための細工が畿簡所も見られる。同じ努力はこれらの書写部分に於ける一行の字詰の甚しい繁簡となつてもあらはれて、一行二十一、二字位から三十六、七字にまで及んでゐるものさへある。書本にはなかつたと考へられる見せけち、或は補入を敢てするやうなことは、厳正な書写校合に於いては決してなされるものではなく、しかもそれが本の外観を整へるためであつたと推定されることは、この校本（或は久樹校訂本にすで見られたものであつたにしても）の信憑性を大いに傷けるものであるこ

とは言ふまでもないであらう。

以上の如くあらゆる方面からの検討を経て、玉松系統本の信憑性は一として否定されざるはなかつた。我々としては流布系統の本文を採る外はないのであるが、それにも種々の問題があり、その吟味は改めてなされる必要がある。それはとにかくとして玉松系統の本文の成立の事情について考へてみると、玉松公刊の後数年を出でずして巨勢利和の宇津保物語新治が著され、そこでもほぼ同様な錯簡の訂正が試られてをり、又、田中道麻呂もこれに注意し、加納諸平にも説があるなど、この問題は当時のうつほ物語研究の中心であつた。これらの中にあつて久樹本や馬陽本の特質は研究が研究といふ形で示されず校訂本といふ形で一本を成立せしめてゐる点にあるとみてもさほど失当ではないであらう。

五

うつほ物語の本文に関する問題としては、以上の外に絵詞に関する問題、錯簡の復原に関する問題など重要なものがあるのであるがそれらについてはすべて他日を期する外はない。しかしそれはそれとして、又、上來加へて来た考察はまことに粗雑なものではあるが、一応現存資料によつて確か得る限りでは現存の物語本文はあらゆる可能な面からの吟味に耐え、その信頼度は意外に高く、他の方面の研究の基礎にもなり得る程度のものであると言ふことができよう。又、非常に特異な本文をもち、一見まことに合理的である玉松系統の本文はその実全く信憑性を欠き、これを基礎としての諸研究は甚だ危険であることも明らかにできたと思ふ。

註1、新校羣書類第一四卷三三七・八頁。

註2、校本風葉集六八五

註3、校本風葉集一一〇二、一一〇三

註4、「宇津保物語錯簡考序説」国語国文第七卷第三号

註5、河海抄の本文は中書本系統の南葵文庫本を底本とし、実隆

本系統の巖松堂本を以つて校合した。物語本文は浜田本系統の紀氏本を底本として前田本系統の無窮会本(略号ム)及び善要寺本系統の静嘉堂文庫蔵植村正路自筆本(略号ウ)を以つて校合した。上段が河海抄、下段が物語本文である。

註6、花鳥余情の本文は桃園文庫蔵の再慶本系統本を底本とし、

同じく桃園文庫蔵の初稿本系統本を以つて校合した。物語本文は紀氏本を底本として、無窮会本及び善要寺本系統の新宮城書蔵本(略号シ)を以つて校合した。さきに植村本を以つてしたのは、本書が「初秋」を欠くためである。

註7、未刊国文古註釈大系第一一巻所収

註8、未刊国文古註釈大系第一〇巻所収

註9、「宇津保物語の絵詞及年立に就いて」国語国文第二二巻第二号

註10、「宇津保物語は鎌倉以後の偽作か」国学院雑誌第三一巻第六号

註11、天理図書館に自筆本現蔵。なほ笹淵友一先生「川嶋心貞述

宇津保物語考について」九大国文学会誌第一一号参照。

註12、「宇津保物語の言語とその成立年代」国語国文第二二巻第四号

註13、「宇津保物語の成立年代並に作者について」文学第一九巻第七号

註14、「物語の成長——宇津保物語の場合——」芸文研究第二輯
註15、試みに尊卑分脈を検すれば、藤原ただまさ五人、藤原かねまさ四人、源まさより三人といふ状態である。

註16、「用語と著作年代」国語国文第一二巻第七号第八号

註17、「宇津保物語の言語とその成立年代再論」国語国文第一三巻第四号

卷第四号

註18、国文学攷第二巻第二輯

註19、国語国文学研究第七輯。なほ武田宗俊氏も最近文学第二一

巻第六号所載の論文で同様なことをして居られる。

註20、「宇津保物語の錯簡と細井貞雄の業績」国語と国文学第二

八巻第八号第九号

註21、武村氏前掲論文参照。

註22、三条西本を臨纂せる桃園文庫本による。

註23、以下引用本文はすべて九大本に示された久樹本の本文による。

註24、「藤原の君」四七ウ(書写の部分)から四八オ(刊本の部分)

——都立広尾高等学校教官——